第一次ロシア革命におけるパルヴス、トロツキー、レーニン-その革命思想をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7763

明治大学大学院紀要
第24集(3) 1987.2

第一次ロシア革命におけるパルヴス、トロツキー、レーニン

——その革命思想をめぐって——

A NOTE ON PARVUS, TROTSKY AND LENIN IN THE FIRST RUSSIAN REVOLUTION 1905 ——WITH SPECIAL REFERENCE TO THEIR REVOLUTIONARY THOUGHTS——

博士後期課程　政治学専攻61年入学
西　川　伸　一
NISHIKAWA SHIN'ICHI

はじめに

1905年1月9日（露暦、以下同じ）の「血の日曜日」事件は、周知のように、前世紀後半から高まりを見せていたロシアの革命運動に新時代の到来を告げ、やがて来るロシア革命の発端となった。しかしまたこの事件は、ロシアのマルクス主義者たちにとって、それまで彼らが抱いていた革命運動の展望に、再考を迫る契機となったという点でも興味深い。ほとんどが国外に亡命していた彼らは、この事件によって、その予想をはるかに上回るロシアの民衆の革命性を思い知らされたのである。レーニンは、「血の日曜日」の翌日、興奮した筆致で、民衆の革命性を次のように評している。

「長いあいだブルジョア的な反政府運動の局外にあったようにみえた労働者階級が、自分の声をあげた。目のまわるほどの速さで、広範な労働者大衆が、その先進的な同志たち、自覚ある社会民主主義者に追いついた。」[1)]

この「血の日曜日」まで、ロシアのマルクス主義者たちは、いずれもプレハーノフの「非連続的二段階革命論」に依拠して、ロシア革命を展望していた。すなわち、プレハーノフの認識によれば、資本主義の発達がまだ低い段階にあるロシアにおいては、当面する革命は、ツァーリズムを打倒し、ブルジョアジーに政権を委ねるブルジョア革命であった。そして、ブルジョア支配下での資本主義の比較的長期にわたる発展と、プロレタリアートの階級的成長を経たのちにはじめて、社会主義革命が展望できるとしたのである[2)]。プレハーノフは、「産業の発展のより高い国は、その発展のより低い国に、ただこの国自身の未来の姿を示しているだけである」というマルクスの言葉を墨守していた。

しかし「血の日曜日」は、プレハーノフの公式を大きく揺さぶった。予期せぬ民衆の革命性を目の

あたりにしたロシアの革命家たちは、これ以降、当面するロシア革命の構想の再検討をめぐって論争を展開することになる[3]。それは、彼らが半ば所与のものとして受け入れてきたプレハーノフの公式を、新たなロシアの情況を考慮した上で、いかに修正するかということを意味していた。具体的には、その主要な論争点は、革命の階級的な担い手と革命の性格づけをいかにするかという点に集約された。そして、この論争の口火を切ったのは、ロシア生まれのドイツ社会民主党（以下ＳＰＤ）員パルヴス Parvus；Парвус だった[4]。

彼は「血の日曜日」にいちはやく反応し、プレハーノフの公式を否定して、ロシアの革命家たちに「爆弾のような効果」[5]を及ぼした。世紀末、ＳＰＤ左派の理論家として鳴らしたパルヴスが示したロシア革命の構想は、「労働者民主主義論」Arbeiterdemokratie；рабочяя демократия として知られている。1905年革命の経験から紡ぎ出されたレーニンの「労農民主独裁論」及びトロツキーの「永続革命論」は、「マルクス主義的通念に対する徹底的再構成」と位置づけられている[6]。しかし、後述するように、前者はパルヴスの革命論に対するアンチ・テーゼとして、後者はその発展・応用として、いずれもパルヴスを経由して案出されている。その意味で、1905年の革命論争においてパルヴスが果した役割は、決して小さくない。

この小稿の目的は、パルヴス、トロツキー、レーニンの三者に考察の対象を限定し、この時期の三者の革命思想の検討を通して、パルヴスの労働者民主主義論の特徴を明らかにすることにある。三者の見解の略述に際しては、当時の主要な論争点であった革命の担い手とその性格づけに関する見解、及びその前提となる情勢をめぐる認識を、叙述の共通の枠組としたい。この作業は、トロツキーの「知的協力者」（ドイッチャー）というパルヴスの位置づけを再考する一助となるはずである。

第１章　パルヴスの労働者民主主義論[7]

(1)　変革主体としてのプロレタリアート

論争の発端となったパルヴスの労働者民主主義論は、トロツキーの『１月９日以前』なるパンフレットに彼が付した１月18日付の序文（以下「序文」）[8]において、その骨子が展開された。この「序文」は、ロシアの革命家たちのそれまでの常識を打ち破り、ロシアのプロレタリアートはツァーリの封建的支配から直接に（ブルジョアジーの支配を経ることなしに）解放されることができ、革命の担い手として臨時政府を樹立することができると述べた画期的宣言である[9]。まずは、変革主体としてプロレタリアートを導き出す過程を、「序文」に則して略述しておこう。

パルヴスが注目したのは、ロシア社会の発展の特殊性、とりわけ都市形成の特殊性だった。それによれば、西欧では、政治的民主主義の主体となる小ブルジョアジーが都市を作った。その結果、都市は中産階級の数的優位を背景として、政治的民主主義の中心という政治的意義を有して、資本主義の到来を迎えた。しかしロシアの都市は、中国流に、すなわち官僚的性格を帯びた行政的中心として発達したため、西欧のような政治的意義を持つことはなかった。そこへ資本主義が押し寄せてきた。その結果、ロシアには資本主義的ブルジョアジーはいるが、政治的民主主義の主体となる中間的ブルジ

ョアジーは育たなかった[10]。

それゆえパルヴスは、ロシアの小ブルジョアジーは、「自らの階級的綱領を持つことができず」革命において指導的役割を期待することはできないと、その脆弱性を論断する[11]。残る勢力は、人民の多数を占める農民と都市に集中する新興のプロレタリアートである。しかし彼は、農民を変革主体とはみなしていない。農民は政治的にはまだ覚醒しておらず、独自の階級的目標や要求を掲げるには至っていない。彼らはせいぜい国内の政治的無政府状態を拡大するにすぎないというのが、パルヴスの農民認識であった[12]。

こうしてパルヴスは、革命の唯一の担い手としてプロレタリアートを導き出す。

「ロシアで革命的な体制転覆をなし遂げうるのは労働者だけである。ロシアの革命的臨時政府は労働者民主主義の政府であろう。」[13]

当面する革命で変革主体となるのはプロレタリアートであるが、この革命の性格はブルジョア民主主義革命である。「労働者民主主義」は、この不照応の集約的表現といえよう。そしてここに含意されていたのは、1848年革命の教訓だった。パルヴスは、当時のロシアを48年革命前夜のヨーロッパとパラレルにみることによって[14]、革命後のブルジョアジーの裏切りを透視していた。それゆえ、48年の失敗を繰り返さないために、マルクスの『1850年3月の中央委員会の同盟員への呼びかけ』（以下『呼びかけ』）に示されたプロレタリアート主導下の連続革命の構想を、ロシアで実践しようとしたのである[15]。全人口の12分の1にすぎなかったロシアのプロレタリアートにその期待を託した背景には、彼が1890年代以来、SPD 党員として抱き続けてきた「革命的労働者に対するほとんどロマンチックな信念」[16]があったと思われる。この信念は、ドイツのプロレタリアートに対象を限ったことではない。それは、次のレーニンへの反論に明らかである。

パルヴスは、1905年10月、ミュンヘンからロシアへ戻る直前に書いたとみなされる『我々はどこで別れているのか？　レーニンへの回答』[17]（以下『回答』）で、プロレタリアートの自然発生性の評価をめぐって、鋭くレーニンを批判する。すなわち、「日和見主義との闘争において、我々に確信を与える自然発生的過程」に、レーニンは「社会革命的発展をみないで、日和見主義的恐怖をみている」[18]と。これに対してパルヴスは、プロレタリアートの革命力量に対する彼自身の揺るぎない信頼を、次のように示すのである。

「我々の期待と支柱は、常にどんな場合でも、労働者階級の社会革命的本質である。」[19]

プロレタリアートの革命的自然発生に対するパルヴスの積極的評価は、ローザ・ルクセンブルクのそれにも匹敵するものといえよう。それはまた、彼が「航路は非常によく学んだが、海にはまだ出ていない船長のようだ」[20]と形容したロシア社会民主労働党への不信感の表明でもあった。それまで彼は、ロシア党の内訌こそ革命の最大の障害とみなし、機会あるごとにその不毛性を指摘していたのである。それゆえロシアのプロレタリアートに、ドイツのプロレタリアートと同等の期待をかけることになった。以下のパルヴスの述懐は、その傍証となろう。

「ロシア人であろうとドイツ人であろうと、プロレタリアートの階級闘争は常に同一であり、民族

的な相違や信仰上の相違を知らない。」[21]

(2) 革命情勢認識

世紀末、パルヴスは、世界経済論に関する研究に没頭し、資本主義の帝国主義段階への転化を予見していた。そして、一国の経済は、世界経済の不可分の一部分として組み込まれているとの認識から、一国の革命的成熟度は一国的にではなく、全体としての世界経済の成熟度によって測られなければならないとの結論に達した[22]。資本主義の世界的規模での発展を巨視的に捉え、そこから革命の現実性を導出する—こうした分析枠組をもって、パルヴスは20世紀初頭の国際情勢を眺めていたのだ。後進国ロシアにおける革命の現実性も、この分析から引き出された。

しかし彼は、その現実性ゆえにツァーリズムが自動的に崩壊するとは、決して思わなかった。パルヴスの歴史認識によれば、必然性の到来を漫然と待機しているからこそ、社会主義者はそれまで「客観的歴史過程」に対して常に遅れを取ってきたのであった。

「人間はいまだかつて自分たちの創り出した社会的条件から十分に利益をひき出したためしがない。彼等は常に客観的歴史過程よりもはるかに前進しているつもりであるが、実際にははるかにおくれているのである。ヨーロッパの資本主義体制は長い前からヨーロッパの経済政治文化の発展の障害となってきている。資本主義体制が生き残っているのは大衆が彼等の悲劇的な状態をなお十分に悟っていないからにすぎない。プロレタリアートの政治的エネルギーが十分結集されていず、社会主義政党は決断と勇気に欠けている。」[23]

パルヴスの目には、当時のＳＰＤは、すでに資本主義が桎梏と化している客観的歴史過程を認識できず、その自動崩壊を運命論的に待機していると映じていた。そして、ＳＰＤへの失望は、ロシアのプロレタリアートへの希望と対置された。しかし彼らを指導すべきロシアの党(特にメニシェヴィキ)にも、類似の徴候がみられたのである。

プレハーノフの公式に忠実たらんとするメニシェヴィキは、当時の運動主体がプロレタリアートだったにもかかわらず、ブルジョアジーに政権を委ねるべきだという立場にあった。パルヴスは、メニシェヴィキが「プロレタリアートの革命軍が勝利を得るだろうとき、政治権力をブルジョア民主主義に自発的に譲るべきかどうかという議論に没頭」しているのはナンセンスだと断じる[24]。彼は、ロシアの社会主義者がロシアの後進性に運命論的に屈服していることに対しても、我慢ならなかったのだ。

そして、メニシェヴィキやＳＰＤに散見されたこの態度は、「歴史発展の運命論的解釈」だとして、その本質をこう暴く。

「もし階級関係が、単に直接的に事件の歴史過程を決定してきたのなら、我々には頭を悩ます理由はない。そうならば、天文学者が内惑星の太陽面通過の瞬間を計算するのと同様に、社会革命の瞬間を計算して、座して見ることのみが残ることになる。」[25]

パルヴスの革命情勢認識の特徴は、受動的、歴史的に生成された客観的革命情勢を運命論的に受け

入れ、その昂進を待機するのではなく、客観的情勢を背景に、その昂進を政治闘争によって能動的、意図的に創出しようという点にあったのである。

(3) 永続革命の視点

マルクスが『呼びかけ』で定式化した永続革命論には、社会的変革の段階的連続性と国際的連続性という二側面があった。前者は、後進国のブルジョア革命がそのままプロレタリア革命の直接の序曲となるということであり、後者は、このブルジョア革命が先進国のプロレタリア革命を惹起し、それが後進国革命に反作用を及ぼして、そのプロレタリア革命への移行を急速に可能にするということだった[26]。パルヴスは、この永続革命をロシアを発火点として遂行しようとしたのである。「序文」において彼は、次のように述べている。

「社会民主党は、革命の出発点たる専制の打倒のみならず、さらなるその発展全体を考慮に入れねばならぬ。社会民主党は、自己の戦術を、一政治的時点に合わせることはできない。それは継続的な〔オリジナルでは непрерывная、1906年に出された『ロシアと革命』に収められた再録版では продолжительная〕革命の発展に向けて準備されねばならぬ。」[27]

パルヴスは、前述の『回答』においても「継続的な革命」という表現を用いているが、この時は беспрерывная を当てている[28]。なぜこの表現を3度も改めているのか、またなぜ「継続的な」という形容詞に перманентная (=permanent) を用いなかったのかは想像の域を出ないが、彼がそれだけこの表現に細心の注意を払っていたということだろう。とまれ、「序文」で示された「継続的な革命」とは、専制打倒後の革命諸勢力間の抗争＝「内戦」を意味していた。パルヴスは、この内戦、すなわちブルジョアジーの裏切りに対してプロレタリアートを備えさせるべく、党による強力な指導を要求している[29]。この「継続的な革命」の段階的位置づけに説明が加えられるのは、「序文」の直後、2月中旬に書かれたアクセリロート П. Б. Аксельрод 宛ての書簡（以下「書簡」）においてである。

パルヴスは、アクセリロートがエンゲルスの『ドイツ農民戦争』に拠って、ロシアのプロレタリアートの権力掌握を時期尚早として退けたことに対して、自身のマルクス解釈をこう展開する。

「マルクスとエンゲルスの政治活動の指導理念は、プロレタリアートの支持の下に国家的変革を遂行することであった。そしてこの変革は同時に資本主義から社会主義への過渡をなすもの、あるいは少なくとも社会変革へ向けての政治発展を確保するものでなければならない。…あなたは複雑な政治問題を余りにも単純に解決している。わが国では社会革命は不可能だ。したがってブルジョア革命だ、と。しかしブルジョア革命にもいろいろある。資本主義的リベラリズムから労働者民主主義まで無数のニュアンスのものがある。」[30]

ここでパルヴスは、マルクスの『呼びかけ』に依拠して、革命の段階的連続性を主張し、その中に労働者民主主義を位置づけようと試みた。すなわち、当面の革命によって成立する労働者民主主義とは、社会主義革命への指向性を明確に持った過渡的段階として位置づけられたのである。

一方、革命の国際的連続性については、「血の日曜日」の直前に、すでに次のような見解に達していた。

「資本主義の世界的発展過程は、ロシアに政治的大変動をもたらす。この大変動は、全世界の資本主義国に影響を及ぼさないわけにはいかない。ロシア革命は資本主義世界をその政治的根底において揺さぶり、ロシアのプロレタリアートは、社会革命の前衛の役割を演じよう。ロシアのプロレタリアートの政治闘争に従うことによって、我々は国際社会主義の世界的展望へと導かれよう。」[31]

この見解を、4月発表の「トヴェリ委員会への公開状」の中で示された「ロシアは民主主義革命に直面し、西欧は社会革命に直面している」[32]との言葉と重ね合わせるとき、その意味はより鮮明になろう。つまりパルヴスは、ロシアのブルジョア革命（担い手はプロレタリアートだが）に、西欧プロレタリアートの革命的エネルギーを覚醒させ、西欧に社会主義革命を惹起させるインパクトとなることを期待していた。それはまた、カウツキーがすでに1902年に『イスクラ』紙上で表明したロシア革命への期待を、“より明確な言葉で”示したものだといわれる[33]。カウツキーは、ドイツの革命運動の停滞をこう嘆いていたのだった。

「西欧からの革命的イニシャチブだけをあてにしていたロシアは、今や自分自身で西欧にとっての革命的エネルギーの源の役となる準備をしているのかもしれない。燃え上がるロシアの革命運動は、我々の隊列に蔓延しはじめている意気地のない俗物根性とこせこせした策動の精神を駆逐し、再び、闘争欲と我々の偉大な理想に対する熱狂的な帰依を、煌々たる炎で燃え上がらせるための、最も強力な手段であるかもしれないのだ。」[34]

(4) 革命の完成図

以上のように、パルヴスの労働者民主主義論は、永続革命論的射程を備えていた。しかし彼は、文字通りの“永遠に続く”革命を構想していたわけではない。そこには、当面の革命がいずれ到達する定点が想定されていた。「序文」では、その定点としての労働者政府の直接の目標は、「現代工業国の複雑多様な全生活を包摂する国家組織」の創出と規定された[35]。

10月半ば、ロシアに帰国したパルヴスは、11月、『イスクラ』及び『ソツィアル・デモクラート』の後継紙として創刊された『ナチャーロ』に、綱領的論文「我々の任務」[36]を執筆する。そこで彼は、「序文」での規定を、「労働者民主主義の発展を保証するような国家秩序」の創出と換言した。そのための具体的施策として、ブルジョア民主主義の急進的諸要求の実現のほか、団結権、スト権の保障、労働立法（特に8時間労働日）の実現などの「純粋にプロレタリア的な要求」の達成も掲げられている[37]。だが重要なのは、彼がこの体制をプロ独裁と明確に区別している点である。

「この事態は国内の生産関係を根本的に変革することを任務とするところのプロレタリアート独裁ではまだないが、すでにブルジョア民主主義よりもはるかに前進している。…われわれの任務はブルジョア革命の枠を拡大し、この中でプロレタリアートの利害を前面に押し出すこと、ブルジョア憲法自身の中で社会革命的な基礎を可能な限り広汎に創出することである。」[38]

2月の「書簡」に示された労働者民主主義の位置づけは、こう言い改められた。前述した社会主義革命への明確な指向性とは、ブルジョア革命の枠を量的に拡張することによって、プロ独裁に漸近線的に接近することだったといえよう。そして、この労働者民主主義体制の完成のメルクマールとなったのが、「現代工業国の複雑多様な全生活を包摂する国家組織」の創出だったのである。ではパルヴスは、こうして準備されるプロ独裁への基盤は、何をもって社会主義革命＝プロ独裁へと質的に転換を遂げるとしたのだろうか。この契機として彼が期待していたのは、西欧における社会主義革命だった。

「ロシアの独裁体制は西ヨーロッパ資本によって支えられている。――ロシア革命は西ヨーロッパのプロレタリアートによって支えられるのである。……8時間労働日をめぐる闘争がロシアのプロレタリアートにも世界プロレタリアートと同じ闘争基盤をもたらした。」[39]

すでに前節でみたように、1905年初頭のパルヴスの国際革命に対する認識は、ロシア革命の西欧革命への波及という一点だった。この「我々の任務」では、8時間労働日闘争を欧露プロレタリアートの共闘の基軸として、西欧プロレタリアートに支援されたロシア革命という視点が付け加えられた[40]。そして、ロシア革命を起爆剤として西欧プロレタリアートが決起するなら、「その時には、われわれは革命的綱領を労働者民主主義の限界をこえて拡大するという任務に直面するのである」[41]とロシアにおける社会主義革命の展望を語っている。こうしてパルヴスの永続革命論的射程は広がったのである。

パルヴスは、ロシア革命を二段階論的に考え、その第1段階から第2段階への質的転換を促す触媒的要因として、西欧革命の成功を挙げている。逆にいえば、西欧革命が勝利するまで、ロシアの労働者民主主義体制は、ある程度一国的に存続しなければならなかった[42]。パルヴスが永続革命論的射程を保持しつつも二段階論を捨てきれない点は、次に述べるトロツキーと彼との分岐点になる。パルヴスは、あくまで『呼びかけ』に忠実たらんとしたのであった。

第2章　トロツキーの永続革命論

トロツキーの永続革命論の萌芽は、1904年夏に書かれた『われわれの政治的任務』においてすでに示されている。ここで彼は、当面するロシア革命は労働運動の勝利として展望できること、そしてこれによって政権に就く労働者党は、社会主義的政策をもその施策に含めざるをえないことを指摘していた[43]。1905年革命は、トロツキーにとって、この仮説の妥当性を確認する好機でもあったのである。

トロツキーが「血の日曜日」前後の時点で、パルヴスと同様のロシア革命の展望を構想していたことは、パルヴスの「序文」を付して彼が『1月9日以前』を発表した経緯からみて、ほぼ想像がつく。変革主体についてもトロツキーは、この小冊子で、「革命の先頭にはプロレタリアートが立つ」と述べて[44]、プロレタリアートの革命性に注目し、それを鼓舞している。トロツキーは、リベラル系インテリゲンチアやブルジョアジーを、ツァーリズムの圧政より革命を恐れる存在とみなしていた。

1904年秋の「祝賀会」運動をはじめとする諸闘争から得た教訓によって、トロツキーは、彼らの革命性を否定し去ったのであった。

パルヴスの「序文」によってこの認識に自信を深めたトロツキーは、亡命革命家の中で誰よりも早く、2月にロシアに潜入し、秘密組織サークルで活動する。この具体的な革命経験は、7月に著された、ラッサールの『陪審員への演説』ロシア語版に付した序文において、「農民に依拠するプロレタリアートの独裁」という変革主体の定式化に結実するのである[45]。これはまた、後述するレーニンの「労農独裁論」へのアンチ・テーゼとしての意味を持っていた。レーニンとの主な相違点は、トロツキーがパルヴスと同様、農民に変革主体として副次的な役割しか期待していない点である。彼はのちに1905年革命を回顧して、農民の革命性の限界をこう指摘している。

農民の自然発生性は、せいぜい自分たちの村などから地主を追い出す程度にとどまり、国家体制の変革を志向するまでには至らない。農民がこの自然発生性から解放されるのは、「新たな社会階級の革命運動と合流する時だけなのだ。」[46]

「新たな社会階級」とは、プロレタリアートであることはいうまでもない。唯一の変革主体としてのプロレタリアートの位置づけは、1906年、獄中で書かれ、「永続革命論を最初に概論した書」（対馬忠行）といわれる『結果と展望』で再度確認されている。ここでトロツキーは、パルヴスの「序文」の分析に明らかに拠りつつ、ロシアの都市の発展の特殊性から、ブルジョア革命を担うはずの中産階級の脆弱性を論じている。そして、こうした中産階級ではなく、プロレタリアートに変革主体を期待する。1890年代の資本主義の急速な発達によって、都市に蓄積した多数のプロレタリアートは、大工場に集中することによって、生産関係の巨大な部分に関わることができるのだ、と[47]。

トロツキーは、プロレタリアートの革命性と集中性に、その圧倒的な量的劣勢をはね返すバネを見ていた。特に、大工場へのプロレタリアートの集中性への着目は、トロツキーのプロレタリアート把握にとって特徴的なものだった。これは、のちに定式化される複合的発展の法則の重要な環になってゆく[48]。

この変革主体の問題同様、革命情勢認識についても、トロツキーはパルヴスから多くを負っていた。それは、何よりもトロツキー自身の次の述懐が雄弁に物語っている。

「彼〔パルヴス〕によって、プロレタリアートの権力の獲得を、天文学的距離にある「終局」としてでなく、われわれの時代の現実的な任務として、把握するにいたったのである。」[49]

前述のラッサール論文への序文でトロツキーは、ロシア革命の現実性を、全世界的規模での資本主義の成熟という全体性の見地から展望していた[50]。この情勢認識に、パルヴスの影響によって、革命情勢の昂進を闘い取る主体性が加えられたといえよう。しかしパルヴスは、革命情勢の激化にも、社会主義へ前進する可能性までは認めていなかった。トロツキーが、パルヴスの理論的枠組から大きく踏み出すのはこの点である。彼は、革命情勢自体が蔵するダイナミクスを高く評価したのだった。1905年革命で、早くも2月にロシアに潜入するという、余人よりはるかに豊富な革命経験が、彼の革命理論形成に強い影響を及ぼしたということは、想像に難くない。

トロツキーは、メーデーのデモの際、辛くも逮捕を免れて、フィンランドに脱出している。ここで彼は捲土重来を期していたが、その時すでに次のような見解に到達していた。

「社会民主主義の当面の任務は、同時に民主主義革命を完成するであろう。しかしプロレタリアートの党は、ひとたび権力を獲得するや、民主主義的綱領に縛られることは不可能だろう。社会主義的政策の道へと突入せざるをえないであろう。」[51]

トロツキーは、革命運動自体の持つ惰力を大きく評価し、そこにマルクスの二段階論を突き破る現実性をみたのであった。革命の渦中にあっても「プロレタリア独裁ではまだない」とロシア革命の限界設定に固執したパルヴスとはここで異なる。パルヴスは、社会主義的変革への質的転換には、西欧の社会主義革命が必要だと考えていた。しかしトロツキーにとって、ロシア革命の社会主義への前進は、革命の内在的論理によって規定されるものだった。そしてこの情勢認識は、永続革命論形成へと連動するのである。

トロツキーは、10月に再び帰国し、ペテルブルク・ソヴェト副議長として活躍、そして『ナチャーロ』第10号（11月25日）掲載論文「社会民主党と革命」において、ついに彼独自の永続革命論に達する。

「最小限綱領と最大限綱領の間には、革命的連続性が定まっている。それは一撃ではなく、1日でも1カ月でもなく、これは1つの完全な歴史的段階である。前もってその継続期間を計算するのは不合理なことだろう。」[52]

革命の持つ惰力は、こうして「歴史的段階」と位置づけられた。トロツキーは、ブルジョア革命と社会主義革命を融合させ、連続した一段階とし、最小限綱領から最大限綱領への成長転化を構想したのである。

しかし、社会主義的政策が明確になればなるほど、「農民に依拠するプロレタリアートの独裁」の支持基盤は揺らぐことになる。トロツキーは、私有財産に根強く執着する農民は、結局プロレタリアートの政策とは相容れず、やがてその多数が離反すると予想していた。彼がロシア革命の存続にとって障害とみなしていたのは、ロシアの生産水準、技術水準の後進性といった経済的障害ではなく、農民層の不可避な離反によるプロレタリアートの孤立という政治的障害だった。「手持ちの手段だけではロシアの労働階級は、農民の援助を失う瞬間に、押しつぶされてしまう」[53]というトロツキーの言葉に明らかなように、この障害を乗りこえる手立てはロシアにはない。そこで彼は、農民の支持に代わる新たな支持を、ヨーロッパのプロレタリアートに見出そうとしたのである。

「ヨーロッパ・プロレタリアートの直接の政治的援助なしには、ロシアの労働階級はその権力を保持し、その一時的覇権を永続的な社会主義的独裁に転化させることはできないだろう。」[54]

トロツキーは、ロシア革命が西欧プロレタリアートに革命を志向する勇気を吹きこみ、彼らが社会主義革命に立ち上がることに、ロシア革命の成否の全てを賭けたのである。トロツキーの永続革命論にとって、革命の段階的連続性と国際的連続性とは不可分のものだった。それゆえトロツキーには、ロシア革命の一国的存続という視点はない。ロシア革命は、国際革命の一環としてのみ勝利するもの

と規定されていた。すなわち、国際革命こそが、トロツキーの永続革命論の完結点だった。のちに彼はその壮大な構想をこう定式化している。

「社会主義革命は、民族的舞台で開始され、さらに国家相互間に、最後には世界的舞台にまで発展させられる。かくして、社会主義革命は、言葉のより新しく広い意味において、永続革命となる。それは、われわれの住む遊星全体での、新社会の究極的勝利においてのみ、完結しうる。」[55]

トロツキーは、ヨーロッパの社会主義者の同時代人のうちで、パルヴスから最も多くの知的影響を受けたといわれている。しかし彼は、この影響を、1905年の革命運動の「動力学」（トロツキー）から、全く新たな理論に転化させたのである。マルクスの公式を突破した点で、トロツキーの永続革命論は、パルヴスの労働者民主主義論と大きく隔っている。トロツキーが立論の土台としたのは、革命の現実であって教条ではなかったのだ。

第3章　レーニンの労農民主独裁論

1905年4月、レーニンは、「社会民主党と臨時革命政府」を著し、パルヴスが「序文」で示した見解を批判しつつも、プレハーノフから受け継いだブルジョア革命論を修正し、いわゆる「労農民主独裁論」を提出する。すなわち、このレーニンの新たなブルジョア革命論は、パルヴスの所論への反駁として成ったともいえよう。

レーニンは、パルヴスが重視したプロレタリアートがロシアではまだまだ少数派であると指摘し、パルヴスが主張するような「労働者民主主義派の政府」は、「人民の膨大な多数者に依拠」しないゆえに、「ありえない」と断じる。レーニンが対置する「恒久的な」革命的独裁の勢力配置は、以下のようであった。

「それ〔ロシアのプロレタリアート〕が膨大な、圧倒的多数者になることができるのは、半プロレタリア、半経営者の大衆、すなわち、都市および農村の小ブルジョア的な貧民大衆と結合するばあいだけである。」[56]

特にレーニンは、ロシアの全人口の8割を占めた農民、しかも1904年末以降、グルジア、ウクライナなどの辺境で革命性を発揮し、労働者との連帯の構えを見せはじめた農民に注目していた。『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（1905年7月、以下『二つの戦術』）では、「農民は革命を最後まで遂行できる」と述べる[57]ほどに、その革命性に信頼を寄せるのだった。こうして彼は、圧倒的少数派のプロレタリアートにとって不可欠の同盟相手を農民に期待し、当面する革命の変革主体を「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」と定式化した。パルヴス、トロツキーに比べ、レーニンは、農民の革命性を一段高く評価し、プロレタリアートと対等の変革主体として農民をみなしたのである。

しかしパルヴスは、この理論を次のように批判している。

「彼〔レーニン〕は、革命的蜂起のためにわきからの同盟者を求めている。なぜなら、プロレタリアートの革命的エネルギーを信頼していないからだ。」[58]

この批判の行間からは、両者の革命家としての出自の相違が読み取れよう。レーニンは忠実なマルクス主義者であったが、同時にロシアの革命的伝統を継承する、ロシアの革命家だった。彼は、強力な革命的インテリゲンチア集団に比しての、プロレタリアートの質的・量的未熟性という伝統的想念を、革命的昂揚の報に接しても、なかなか払拭できなかったのだ。そして、不可欠の選択として、農民との同盟を提起する。一方パルヴスは、最も成熟したプロレタリアートを擁するＳＰＤの理論家として、積極的なプロレタリアート認識を培っていた。彼にとって、プロレタリアートの革命性は、断じて疑いえないものだった。彼は、「他の諸国民が革命的蜂起の際になし遂げたことを、すべて凌駕する、革命力量をすでに今日展開した」[59]と、ロシアのプロレタリアートの資質を讃えていたのである。

変革主体に関する立場と対照的に、レーニンのマルクス主義者としての側面を強く反映しているのが、彼の情勢認識である。

それまでレーニンは、大著『ロシアにおける資本主義の発展』に典型的に示されたように、ナロードニキに対する論争として、経済学の研究、とりわけロシアの資本主義の発展段階の分析に没頭していた。従って、当時のレーニンにはまだ、パルヴスのように世界経済との連関でロシア革命の現実性を導き出すという視点はない。レーニンは、ロシアでも資本主義の発達が不可避であるという認識から、当面する革命を性格づける。彼の参加を得て作成され、1903年の第２回党大会で採択された党綱領には、おおよそ次のような発展段階認識が示されていた。

ロシアでは資本主義がすでに支配的な生産様式になっているが、資本主義以前の制度の残存物がまだきわめて数多く維持されている。それらの残存物は、経済的進歩をはなはだしく阻害し、プロレタリアートの階級闘争の全面的な発展を妨げ、農民の搾取のもっとも野蛮な諸形態を維持し強化するのをたすけ、全人民を無知と無権利とに引きとめている[60]。

レーニンは、この認識を前提として当面する革命をロシア一国の枠組で考え、ツァーリズムに象徴される旧時代の残存物の除去に、革命の課題を置いた。この立場は、「血の日曜日」以降も堅持されていた。『二つの戦術』において、当面する革命は、「資本主義のもっとも広範な、自由な、急速な発展をもっとも完全に保障するような、まさにそういう変革」[61]と規定されたのだったのである。それゆえレーニンは、この革命が民主主義的変革の枠をおし広げるにとどまり、決して社会主義的変革へは至らないことを、繰り返し強調していた。ブルジョア革命と社会主義革命を峻別する点では、レーニンはパルヴスと同じ立場にある。しかしその相違は、レーニンが労農主導のブルジョア革命の一国的存続を、長期的に位置づけている点にある。

「それ〔労農独裁〕は、……農村の利益になるように土地財産を根本的に再配分し、共和制までをふくめて首尾一貫した完全な民主主義を実行し、農村生活からだけではなく工場生活からもいっさいのアジア的・債務奴隷的なものを根こそぎにし、労働者の状態のいちじるしい改善と彼らの生活水準の向上との礎をおき、最後に……革命の火事をヨーロッパに飛火させることができるだろう。」[62]

換言すれば、変革主体たる労農両階級が、最小限綱領を十分に達成したのち、ようやく国際革命の

展望が日程にのぼるのであった。前掲「社会民主党と臨時革命政府」では、このブルジョア的発展期は、「幾十年」と想定されている[63]。『二つの戦術』に至る時期のレーニンは、変革主体については労農同盟という独自の構想を示したが、依然として非連続的二段階論に立っていたことがわかろう。彼は、社会主義的な最大限綱領への急速な移行を、「こっけいなこと」と嘲笑したのである[64]。

しかしレーニンは、間断なき革命運動の昂揚を背景に、それ自体の蔵する力学に徐々に気づきはじめる。そして9月には、次のように述べるに至る。

「われわれは、民主主義革命からただちに社会主義革命に移行しはじめる。……われわれは永続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしないであろう。」[65]

レーニンは、ここではじめて「永続革命」という言葉を用いた。しかしここに含意されていたのは、トロツキーの構想のように、2つの革命を一段階に融合させた「永続革命」ではなく、ブルジョア的発展期を短縮させた二段階論だとみなされている[66]。レーニンはまだ、両革命の峻別に固執していたのである。

さて、10月ゼネストから年末にかけて、1905年革命は最後の決戦期を迎えることになる。この渦中の11月下旬、ボリシェヴィキのルナチャルスキー A. B. Луначарский は、ロシアでは、西欧の社会主義革命の支持を得れば、ブルジョア革命と社会主義革命が同時に起こりうるとの見解を、ボリシェヴィキの機関紙『ノーヴァヤ・ジーズニ』に発表する。これは、ルナチャルスキーがトロツキーの一段階論の立場に移ったことを示すとともに、ボリシェヴィキの新たな立場ともなった[67]。レーニンも、1905年末に著した「革命の諸段階、方向および見とおし」で、ルナチャルスキーの見解に接近する。

この短い手記において彼は、労農同盟主導の民主主義革命が勝利したのち、自由主義的ブルジョアジーと、富農及び中農のかなりの部分が離反するとの予想を示す。そして、この労農同盟の基盤の動揺を救うものとして、西欧プロレタリアートの支援に期待をかけるのだった。「方一、ヨーロッパの社会主義的プロレタリアートがロシアのプロレタリアートの救助にかけつけないならば、この闘争はロシアのプロレタリアートだけではのぞみのないものになる」と述べるレーニンには、『二つの戦術』で示されたような、ロシア革命の一国的展望はみられない。さらに彼は、「第二の勝利」として、西欧の社会主義革命と、そのロシアへの再波及による、ロシア革命の社会主義的変革への連続転化を展望しているのである[68]。

ここにおいてもレーニンは、革命の段階的連続性という点では、短期間ながらブルジョア革命と社会主義革命との時間的不連続を想定しており、二段階論の母斑は完全に払拭されていない（連続的二段階革命論）。しかし、革命の国際的連続性という点では、ロシア革命の存続の可否を西欧プロレタリアートの革命性に託すことによって、トロツキーとほぼ同じ認識に立つことになった。

1905年革命期のレーニンは、ロシア一国の資本主義の発達に固執するあまり、まだ資本主義の帝国主義段階への突入を視野に収めるには至っていない。周知のように、彼がこの問題の研究を本格的に始めるのは、第1次大戦勃発以降である。また、革命情勢の持つダイナミクスに注目し、二段階論を

克服するのは、『四月テーゼ』発表による。この二重の意味での認識の遅れが、彼のこの時期の革命思想—特に革命の性格づけに関して—に動揺をきたすことになったといえよう。

むすびにかえて

パルヴスの労働者民主主義論は、すでにみたように、ロシアの現実と、マルクスの『呼びかけ』に示された革命戦略とを、矛盾なく統合させようという試みだった。確かにそこには、理論的整合性はあった。しかし、革命理論とは、実践との整合性がなければ画餅にすぎない。1905年の現実に照らせば、革命の最前線では、特に10月ゼネスト以降、ブルジョア革命の枠組を乗りこえる諸闘争が頻発していた。1905年革命の研究家・原暉之氏は、「もっと深く民衆運動そのもののダイナミズムが分析されなければならない」と指摘している[69]。それゆえ、現実的整合性という点では、革命参加の経験から、その蔵するエネルギーを教条にとらわれることなく革命理論に組み込んだトロツキーに及ばなかった。

この背景を探れば、「ドイツ社会民主党が私の新たな祖国となった」[70]というパルヴスが、ＳＰＤという、いわばマルクス主義の正統派の殻を破れず、ロシアの革命に内在的に思惟できなかったことに行き当ろう。その一端は、彼のプロレタリアート認識と、それに基づいた彼のレーニン批判にもうかがい知ることができる。パルヴスは、ロシアの革命運動を、「ドイツ社会民主党の理念的生徒」[71]という視点で捉えていたのだった。

1905年革命は、奇しくもパルヴス自身が指導した12月ストライキの敗北を契機に、失速してゆく。トロツキーは、当時のパルヴスを「指導者としての素質は全く示されなかった」と回想している。「1905年の失敗は彼にとって堕落の始まりとなる」[72]と。しかし、パルヴスがこの失敗によって限界を知らされたのは、自らの革命家としての資質だけでなく、彼が構想した革命理論もだったのである。

1917年、パルヴス、トロツキー、レーニンの三者は、再びロシア革命に情熱を注ぐ。後二者はもちろん革命家として。しかし前者は「革命の商人」として。いずれにせよこの三者は、1917年の革命遂行の過程でも、枢要な役割を担うことになる。これについては次なる課題としたい。

注

1) 「ロシアにおける革命」『レーニン全集』（大月書店）第8巻、58頁。
2) 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房、1967年）50-58頁。
3) これについては、高橋磐氏の次の労作がある。本稿作成にあたって資するところ大であった。高橋磐「ロシア革命における永続革命論争」『現代思想』（青土社）1976年2、3、4、6、11、12月、1977年2、4、7、8、10、12月号。
4) パルヴスの生涯については、ゼーマン、シャルラウ、蔵田、門倉訳『革命の商人』（風媒社、1971年）を参照されたい。
5) Heinz Schurer, "Alexander Helphand-Parvus-Russian Revolutionary and German Patriot", *The*

Russian Review (1954), p. 317.

6) 溪内謙『現代社会主義の省察』(岩波書店、1978年) 36頁。

7) これについては、山口和男「パルヴスのロシア革命論」『思想』(岩波書店) 1967年10月号、同『ドイツ社会思想史研究』(ミネルヴァ書房、1974年) 99-126頁に再録、田中良明「パルヴスの労働者民主主義論」『経済学雑誌』(大阪市立大学) 第66巻第1号 (1972年) がある。併せて参照されたい。

8) トロツキー、原暉之訳『第二期トロツキー選集3　わが第一革命』(現代思潮社、1970年) 446-458頁に訳出されている。また、Парвус, *Россия и революция* (С-Петербург, 1906), стр. 134-143 に "Что даём нам 9-ое января" と題して再録された。

9) Peter Lösche, *Der Bolschewismus im Urteil der deutschen Sozialdemokratie 1903-1920* (Berlin, 1967), S. 36.

10) Парвус, указ. соч., стр. 136. (邦訳書、448-449頁)。

11) Там же. (同 449頁)。

12) Там же, стр. 140. (同 454頁)。

13) Там же, стр. 141. (同 455頁)。

14) Winfried B. Scharlau, "Parvus und Trockij: 1904-1914 Eine Beitrag zur Theorie der permanenten Revolution", *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Vol. 10 (1962), S. 360.

15) 山口、前掲『ドイツ社会思想史研究』122頁。

16) Winfried B. Schurlau, Parvus-Helphand als Theoretiker in der deutschen Sozialdemokratie und seine Rolle in der ersten russischen Revolution (1867-1910), Phil. Diss. Münster/Westf., 1960, S. 166.

17) Парвус, *В чём мы расходимся? ответ Ленину* (Женева, 1905). 前掲 *Россия и революция*, стр. 150-176. に再録された。本稿での引用は後者による。

18) Там же, стр. 170.

19) Там же, стр. 173.

20) Парвус, "После войны", *Искра*, Nr.111, 24-ого сентября 1905г.

21) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S. 7.

22) Scharlau, "Parvus und Trockij", S. 351.

23) Парвус, "Война и революция IV. Самодержавие и реформы", *Искра*, Nr.82, 1-ого января 1905г.

24) Парвус, "После войны (окончание)", *Искра*, Nr.112, 8-ого октября 1905г.

25) Там же.

26) 淡路憲路『マルクスの後進国革命像』(未来社、1971年) 53-61頁。

27) Парвус, *Россия и революция*, стр. 138. (邦訳書、451頁)。

28) Там же, стр. 167.

29) Там же, стр. 138. (邦訳書、451頁)。

30) *Социал-демократическое движение в России*, T.I., под. ред. А. Н. Потресова и Б. И. Николаевского (Москва, 1928), стр. 154-156.

31) Парвус, "Война и революция IV. Самодержавие и реформы", *Искра*, Nr. 82.

32) Парвус, "Открытое письмо Тверскому коммитету", *Искра*, Nr. 97, 18-ого апреля 1905 г.

33) Heinz Schurer, "The Permanent Revolution", *Soviet Survey*, No. 32 (1960) p. 68.

34) К. Каутский, "Славяние и революция", *Искра*, Nr.18, 18-ого Марта 1902 г.

35) Парвус, *Россия и революция*, стр. 137. (邦訳書、450頁)。

36) Парвус, "Наши задачи", *Начало*, Nr. 1, 13-ого Наября 1905 г. のちに *Neue Zeit*, 24. Jg., 1905/06, Bd. 1, S. 451-458 に "Die Aufgabe der Sozialdemokratie Rußlands" と題されて転載された。山本統敏編『マルクス主義革命論史2　第二インターの革命論争』(紀伊国屋書店、1975年) 247-253頁に独訳から邦訳さ

れている。

37) Там же. (邦訳書、250-251頁)。

38) Там же. (同 251頁)。

39) Там же. (同 252-253頁)。

40) Scharlau, "Parvus und Trockij", S. 309.

41) Парвус, указ. соч. (邦訳書、253頁)。

42) 田中良明、前掲論文、65頁。

43) 高橋磐「トロツキーとロシアの革命家」『別冊経済セミナー マルクス死後100年』(日本評論社、1983年) 169頁。

44) トロツキー、前掲『わが第一革命』89頁。

45) 高橋磐、前掲論文、170頁。

46) トロツキー、原暉之訳『第二期トロツキー選集2 1905年』(1969年) 56頁。

47) トロツキー、姫岡玲治訳「結果と展望」『トロツキー選集5 永続革命論』(現代思潮社、1961年) 40-41頁。

48) トロツキー、山西英一訳『ロシア革命史㈠』(角川書店、1972年) 27頁。

49) トロツキー、澁澤龍彦他訳『わが生涯Ⅰ』(現代思潮社、1982年) 317頁。

50) Michael Löwy, *The Politics of Combined and Uneven Development* (London, 1981), p. 48.

51) トロツキー、前掲『わが生涯Ⅰ』324頁。

52) Троцкий, "Социалдемократия и революция", *Начало*, Nr. 10, 25-ого ноября 1905г.

53) トロツキー、前掲「結果と展望」54頁。

54) 同49頁。

55) 同「永続革命論」前掲『永続革命論』312頁。

56) 「社会民主党と臨時革命政府」『レーニン全集』第8巻、288-289頁。

57) 同『全集』第9巻、94頁。

58) Парвус, *Россия и революция*, стр. 166.

59) Там же, стр. 140. (邦訳書、455頁)。

60) 雀部幸隆『レーニンのロシア革命像』(未来社、1980年) 281-282頁。

61) 『レーニン全集』第9巻、38頁。

62) 同45-46頁。

63) 同『全集』第8巻、285頁。

64) 「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」同『全集』第8巻、293頁。

65) 「農民運動にたいする社会民主党の態度」同『全集』第9巻、243頁。

66) 高橋磐「ロシア革命における永続革命論争 「自由の日々」と論争の帰結」『現代思想』1977年10月号、227-228頁。

67) 同230-231頁。ルナチャルスキー、原暉之訳『革命のシルエット』(筑摩書房、1973年) 78頁。

68) 『レーニン全集』第10巻、77-78頁。

69) 原暉之「1905年ロシア革命研究の方法と論争」『現代史研究』1970年、第24号、3頁。

70) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 7.

71) Ebenda, S. 66.

72) トロツキー、前掲『わが生涯Ⅰ』318頁。

付記・わが国のパルヴス研究の第一人者・山口和男教授(甲南大学)が、86年4月14日、急逝された。この拙い小稿を、山口教授追悼に捧げたいと思う。